

平成 27 年 7 月 26 日(日)

第 1 回 ヘーゲルを読む会

担当 村田

テキスト本有斐閣新書「ヘーゲル論理学入門」

はじめに

ヘーゲル論理学の位置づけ

P8) 『精神現象学』を前提にしている。

感覚的確信→知覚→悟性→自己意識→理性→精神

意識と対象の完全な一致、対象の意識と自己意識の一致

↓

絶対知

ヘーゲル「論理学」のスタートはここから。

→そのため認識論、認識史と結合した「論理学」という特徴がある。

(いよいよ本論！)

第 1 部 有 論

☆有論の課題と構成☆

1. 課題

「あるということ」とはどういうことか？

「有」は直接的なもの、感覚的データという意味を持つ。有論の中の有・質・量は世界が人間に直接最初にあらわれる姿。

2. 構成

(全体を俯瞰すると) ⇒ (1) 質 (2) 量 (3) 限度

(1) 「質」①有と無と成について。ものごとのはじまりから変化していく様子。

②変化について。あるものと他のものとの弁証法→変化

③向自有。変転の中で自己にとどまる、他者へいって自己にとどまる。

(2) 量 (質一般の捨象) ①純量、②定量、③度

(3) 限度 (質と量との統一)

次ページから詳細の説明

(1) 質

① 有

有→無→成。という展開は分かりにくい。

有はただ「ある」というだけで「純粹の無規定性」であり空虚である。

直感されるものはなにもない、思考さるべきなものもない、と言う意味で空虚な思考。

↓

「有は無である」有は無と同一、無は有と同一。

有→無への移行と無から有への移行とは統一してとらえるべきで両者の統一が成。

つまり、ヘーゲルは「成」をあきらかにしなかった。

例)「万物は流転する」 存在する(有)ものであると同時に  
もとのままではない(無)もの。

つまり、有の要素と無の要素の統一された姿が万物の「流転」(成)の姿である。

流転の2つの側面 無→有 (つまり発生)

有→無 (消滅)

世界には固定・不変のものは存在しない

万物は存在するが存在しない。→つねに発生しつねに消滅している。しかし、  
「有は無である」は神秘的で非合理的であり無理がある。

無理1、成のなかに有と無のきっかけをみようとした。(本末転倒?)

無理2、物事には二面性があると言う見方は重要な功績、しかし論理的叙述に  
際し有と無の同一とした、調和や融合ではないはずだ。

例)「生命」「精神」

生命は自己を否定しながら常に自己同一にとどまる。

生きているものは必ず死ぬ。→いきているものが自身の中に死の萌芽を持っている。

生命(成)→生(有)と死(無)つまり、成は有と無の統一!

② 変化について・・・定有(一なものかである、ということが定有である)・・・

ヘーゲルは有→無→成の展開をより具体的なかたちにさせて定有から向自有への発展をさせている。

定有 「規定された有」「定まった形を持った有」(ヘーゲル)

・有一単純にあるということ。 ・定有一なものかであるということ。

成・・・一個の矛盾(有と無を含む)→「自己のうちにある動揺」→消滅するものに過ぎない。結局は消滅するに過ぎない「自己内の矛盾」によりくずれこの矛盾の止揚の結果「定有」が生ずる。とヘーゲルは言う。

ヘーゲルがここで成から定有をみちびきだそうとするやり方は無理があり非合理的でさえある。

ここでヘーゲルが言うことの重要性は、先ほどの「有」が「定有」として具体的な姿として解明されようとしていること。

ただ「万物の流転」を知るだけでは不十分で、物事が持っている相対的な固定制・安定性を見ないのは正しくないとして変化の中で相対的に固定したものをヘーゲルは考えようとしている。

### 「質」

定有・・「規定された有」。規定された・とはどういう意味か？

定有→なにもものかである→一定の性質を持たないといけない



このような質を持って定有するものが「或るもの」→その質によって現在あるところのもの・質を失うと或るものでなくなるもの→「質」は或るものをそのものたらしめているもの。

現在は「質」は「本質」とは区別された初歩的な段階。他のものとの連関も無視してそのものの性質を直接に見る見方、つまり感覚的な見方。

「あらゆる規定は否定である」(スピノザ)

- 1) あるものたらしめている規定性(質)は、あるものであるという肯定的な面
- 2) この規定性は限定され規定されたものであって「他のものではない」という否定的な面。

質＝実在性と否定性の統一。P. 31

或るものは或るものとしてそれ自身存在するが、しかし他のものではないと言う形でも存在する。

つまり、

或るものは必ず他のものとともに存在する。現実存在するものは単独には存在し得ない。

「或るものは他のものではない」という否定の形で、他のものが或るもの自身の前提となっている点をヘーゲルは重視。

「連関の論理」を萌芽的に→後の「本質論」につづく。

或るものは或るものであり、他のものは他のものとして、相対的に自立して存在。現実の事物は他のものなしには存在しない。相互連関のなかにあらゆるものがある。

- ・「向他有」他のものへの関係の側面
- ・「即自有」向他有の前提になっている相対的固定制、或るものが或るものとして固有の質を持つ側面。

連関している限りでは向他有だが、それ自身相対的自立性を持つ限りで即自有であり、切り離しては考えられない。

ヘーゲルはさらに或るものがかならず他のものになっていくという「変化」をとらえていくことになる。

### 「限度」

「限界」とは、..

或るものは他のものとの連関に於いて存在する。同時に或るものは有限なものであり自己を限定する「限界」「制限」をもつ。或るものはその限界の範囲内で或るもので或る、同時にこの限界を越える時或るものであることをやめて他のものに変わらざるを得ない。

質を限界という視点で見ると

1) 一定の質（有限的）。2) 時間的に他のものによって変わっていくという意味で（可變的）。

「定有」において或るものが他の質を持たない「有限」、或るものの質がいつまでも自己同一にとどまることができないという意味で「変化」せざるを得ない。

有一無一成の展開における単純な成を、ここで有限性と変化性として具体的な形で取り出している。

たんなる「成」はここにおいてより具体的な「変化」という形でとらえている。

「定有」はつねに自分で限界を作り出しこの限界を自分で乗り越えていく。

定有としての或るものが限界を乗り越えるとは他のものになること。

「或るものは他のものになる。しかし他のものは、それ自身一つの或るものである。

したがってこれもおなじく一つの他のものになる。かくして限りなく続いていく」

—岩波文庫 ヘーゲル「小論理学(上)」286 ページ—

しかし万物がただ限りなく変化するものだとみるのではなく、たえず変化しながらしかも自己同一性をたもっているような事物のありようをヘーゲルは「向自有」と呼ぶ。

③ 向自有

真無限と悪無限

「無限」について。

「向自有」の前に上記岩波文庫引用下線部分の「限りなく」についてヘーゲルは検討している。

悪無限・・・或るものが他のものに限りなく変化。どこまでいってもはてしがたい無限、「真の無限」ではない。有限と無限は何処までも分離し有限は此岸、無限を彼岸に。

真無限・・・「有限と無限の統一」でなければならない。

悪無限は何処まで行っても同じ事のくりかえし。

真無限は変化の中で自己の同一性を保持する。

例) 生命体の新陳代謝にて物質的には他のものになりながら一個の統一体としては自己を保っている。

他のものから他のものへとかぎりなく変化するのでなく、「他のものにおもむいてなお自己にとどまる」(岩波文庫 P. 289) といったもの。

「向自有」とはなにか？

ドイツ語の直訳であり、「それだけであるということ」「単独であるということ」。

例) 自我

自我は多くの他者の中で自己同一を保つ、自我は多くの他者の中で相互依存の関係にありながら、自己の自立性・独立性を保つ。自我は他者との相互依存ではじめてなりたちながらこれらの多くの他者との関係を自分自身の要素として内にとりこんでいる統一体。自我は多くの他者との葛藤の中で自己自身にとどまり独立性を保つ。